■インタビュー
共に歩む～総代さん紹介～④

武志大和尚と運命の糸で結ばれた青年会長

山口義男さん

山口義男（80）さんは、善光寺と最も古い縁を持つ総代である。善光寺が開創される前から見えない糸で結ばれた運命の人と言ってもよい。因縁話は半世紀以上前の昭和三十五年三月三日にさかのぼる。当時、先代の大圓武志大和尚はまだ駒澤大学の学生時代。日野公園墓地入口の現在地に善光寺を新たに建立するまでには、さらに十年の歳月を経なければならない。

山口さんは「青年会長」の肩書で呼ばれている。風貌からはとうに青年を卒業した年齢とわかるが、実際いくつなのかを立ち入って聞く人はなく、いつも笑顔で飄々と振る舞う若々しさからすると、おそらく初代青年会長としての功績ゆえに今日まで長くその職責にあるのだろうと想像する。今年十二月で傘寿と聞いて驚くばかり。

話は武志大和尚との運命的な出会いから始まる。

五十五年前の「ひな祭り」の日、二人は九州旅行の途上にあった。学生服を着た二人は、この日、偶然にも豊肥本線の最終列車で阿蘇山麓の坊中駅（現在の阿蘇駅）に降り立った。改札口を出た山口さんの後ろから背中を叩き、「今日どこへ泊るの？」と声を掛けたのが若き日の

武志大和尚である。武志大和尚は山口さんの様子を眺め、「この男は大丈夫！」と踏んだようだ。振り向いた山口さんも「人は良さそうだし、信用してもよい」との第一印象。出会ったばかりの二人は六泊七日の膝栗毛（道行き）を繰り広げる。

偶然とは思えぬ理由があった。「不動前～駒澤」の定期券を見て山口さんは驚いた。当時、武志大和尚は東京都品川区小山の桐ケ谷寺から大学へ通っていたので、最寄りの不動駅から駒澤駅までの定期券を持っていた。山口さんが思わず声を上げたのは、中高の六年間、不動前にある「攻玉社」という歴史のある学園へ通ったからだ。二人の距離は急速に縮み、そこから半ば珍道中のような旅が始まった。

旅の様子を山口さんは大学ノートに毎日書きとめた。表紙に大きなシミのある色あせた旅日記は、こんな調子で綴られている。

「三月四日　指宿　福山旅館　素泊三百円。ビール、ウィスキー少々入る。話に花が咲き十一時になる」

「三月五日　黒田氏博多より持参の乾いたおにぎりいただく。車中、大田原光真寺檀家で同級生の桑原氏と会う。先日車内で知り合った前田氏（鹿児島大ラグビー部キャプテン）のお兄さんの電気屋さんに泊めていただく。夕食をごちそうになり三人で雑魚寝」

「三月六日　寺院に泊めていただく予定が遅くなって中止。交番で紹介してもらい岩戸屋三百五十円。」

「三月七日　南宮崎から大分に向かう途中、京都の女子大生グループより黒田氏、クラッカーと城山饅頭をもらう。桑原氏の姉の嫁入り先で泊めていただく」

「三月八日　お言葉に甘えてもう一泊。夜、大パーティーをしていただく」――

人情の温かさに触れながらの、のどかな旅を続けた二人は、三月九日に中津駅で別れた。

昭和十二年生まれの武志大和尚とは二つ違い。二十代半ばで出会った二人は、その後、東京で再会。山口さんは桐ケ谷寺へも頻繁に通うようになり、その頃、桐ケ谷寺で生活することの多かった黒田白純老師にも可愛がってもらった。泊めてもらう事も多く「山口さん、朝風呂に入って行きなさい」と言われ、「告別式、通夜にはかならず体を清めてから行くんだよ」と教わった。

武志大和尚が、兄の前角博雄老師が開いた米国のロサンゼルス禅センターへ開教師として一年間赴任する時も山口さんは見送った。日本郵船の貨客船で横浜港を出発するまでに何日もかかった。

山口さんはロス滞在中の武志大和尚と文通した。安保闘争で学生運動がピークに達し、全共闘が占拠・封鎖する東大安田講堂を機動隊が強制解除したニュースを報じる新聞なども送った。山口さんは武志大和尚からエアメールで届いたたくさんの手紙を今も保存している。

帰国後、武志大和尚は善光寺開創の大事業に着手。いよいよ桐ケ谷寺から善光寺へ引っ越す時は、桐ケ谷寺総代・佐藤達太郎様（日ノ出石材店の大奥様のご実家）からハイエースを借り、山口さんの運転で卓袱台や座布団二十五枚などの必要品を運んだ。

善光寺に檀信徒の教化組織として婦人会は最初からあったが、青年会はあとから生まれ、武志大和尚の指名で山口さんが初代会長に就いた。目立った活動といえば釈迦殿でクラシック鑑賞会を二～三回開いたことがある程度。「青年会の主たる役目は一斉法要の時の下足番と、ご近所とのトラブルがないよう注意することでした」と山口さん。釈迦殿の中で行われる行事

や講話の様子はスピーカーから流れてくるのを外で聞いた。ある時、武志大和尚に「山口会長、中で聞けよ」と声を掛けてもらったのをきっかけに、お経本を配りながら講話を聞くようになった。「寺の規則に定年がないので、いまだに青年会長です」と笑っている。

「父母未生以前」という禅語がある。山口さんと善光寺との関係は、まさに「善光寺未生以前」の縁。だから武志大和尚が修行したタイのワットパクナムへも同行し、高僧とも親しく面会した。武志大和尚が日本・スリランカ国交樹立五十周年記念の世界平和祈願コロンボ大会に基調講演の講師として招かれ、日本から友好親善使節団を率いて大挙スリランカを訪問した際も、その国賓待遇の晴れ舞台に同席し、歴史的な瞬間を目に焼き付けた。

晩年、入院中の武志大和尚を見舞うと、いつも「本を買ってきてくれ」といってお金を渡された。買ってくると「有り難う、有り難う」の言葉を聞きながら別れたが、出口で「方丈さん、また来ます。お大事に」と振り返ると、ベッドに正座して白壁に向かい合掌する姿があった。臨終の時、家族が一人ひとり武志大和尚の耳元で、それぞれの思いを告げる場面にも加わった。

「二十五歳の頃からお付き合いして、もう

▶善光寺開創当時からずっとかわらず「青年会長」を務める山口さん

八十歳。生涯、善光寺についていくつもり」と山口さん。「私のことより方丈さんの来歴を知ってほしい」と願い、初めて二人の不思議なえにしを語ることを決意したという。

旅行にはいつも参加して下さいます。
善光寺の旗を持つ山口さん（一番右）